

お寺の力が地域社会を変える — 生と死に向き合うコミュニティ・ケア —

神宮寺住職
高橋 卓志

高橋 卓志（たかはし たくし）

1948年長野県生まれ。龍谷大学文学部卒、同大学院東洋史学科中退。海清寺専門道場で禅修行の後、76年、神宮寺副住職、90年、住職。現在、長野県NPOセンター代表、ケアタウン浅間温泉代表理事、龍谷大学社会学部客員教授、東京大学大学院講師なども務める。著書に『寺よ、変われ』岩波新書、他。

3 学舎で教鞭を

司会 今日は信州松本市にある神宮寺の住職兼、龍谷大学社会学部の客員教授で、文学部でも講座をお持ちの高橋卓志先生をお招きしました。

なぜ高橋先生をお招きしたかと言いますと、ここに高橋先生がお書きになった岩波新書の『寺よ、変われ』という本があります。私はこの本から強烈な印象を受けました。いま、私たちの生活の中でお寺という存在は希薄だというのが大方の見方ではないかと思えます。本来であれば、日本の地域社会の中でお寺はコミュニティの核になっておかしくないはずですが、しかし実態は、お寺は仏事をしているのみ。私を含めて、それが一般的な受け止め方ではないだろうかと思えます。

高橋先生の本を拝見して、お寺の持つ力と言いますか、現代社会が失っているものを回復させる公共的な力を、実はお寺という存在は潜在的にもっているのではないかと、ということに改めて気づかされたわけです。そこで、高橋先生に講演をお願いして、皆さんと

考えてみたいと考えました。よろしくお願いたします。

高橋 はじめまして、高橋と申します。いくつかのNPOの代表をしているんですが、そのひとつケアタウン浅間温泉という、もうほとんど人が来ない、別の言葉を使えばひなびたって言うんですが、その浅間温泉に住んでいまして、つぶれていく旅館を次々に借りて、そこで高齢者介護をやったりしています。昨日、このNPOの理事会がありまして、夜遅くまで新しいステージをどう作るか、結構、魅力的な話をしていましてくたびれきっておりました。

私は早寝早起きで、だいたい寝るのが夕方6時半とか7時。早起きで夜中12時半とか1時ぐらいに起きるんですね。こういうのを早起きとはあまり言わないんだけど。その日の10時半に目が覚めるとかも結構あって、それから仕事をし始めるんです。なぜ目が覚めるか。次に何をやるかっていうのが、どんどん寝ている間に湧いてきちゃうわけです。夢か幻か一緒になってきちゃって、「あっ、これはこんなふうにしたらできるかもしれない」って次々出てくるようになって、そうない

ると寝てられなくなって、目が覚めて、起きちゃう。今日も早かったです。2時半でした。

寺は世界最古の非営利組織

今日、そんなことで大矢野先生にお招きいただきました。瀬田の社会学部で市民活動論を教えているんですが、そのメンバーもここに来てくださり、大宮では3年制の大学院の実践真宗学研究科、ここでも同じく市民活動論を教えています。市民活動論は基本的にNPO論で、NPOの設立や運営になってくる。非営利の経営、経営学というのもその中に入ってきているということです。「寺のお坊さんがなんで経営学」とよく言われるんですけども、お寺を非営利組織として考えてみると、非常に最近面白いジャンルになってきています。

今から3年ほど前に95歳で亡くなったピーター・ドラッカーの『非営利組織の経営』という名著があり、私、今日は持って来います。その1ページ目の1行目に、「世界最古のNPOは日本にある。日本の寺は…」という書き出しがあるんです。要するに日本の寺は自主的な組織だったと、ドラッカーは書いているんですけども、寺というものにドラッカーが目をつけて、それが世界の最古のNPOであるという。

当時はNPOとは言いませんでしたが、これはどこを指しているかと言うと、聖徳太子が創建された大阪の四天王寺だということです。四天王寺は4つの機能を持っていると言われています。ひとつは「療養院」、病院です。それから「施薬院」、薬を施すところ。それから「悲田院」。これは当時、ハンセン病などの難病が流行っていて、その収容施設、救護施設としてあったと言われている

す。最後が「教伝院」、仏教を学ぶ学問所ですね。お寺の機能はこの4つだったという。そこを指して、ドラッカーは非営利だと言うわけですね。

「葬式はいらない」か？

今の寺とまるっきり違い、雲泥の差です。今の寺はどうなっているかという、何ていうか、葬式、法事だけやっている。その中で今日、最初に見ていただきたいのがここです。右側が僕の本で、左側が島田裕巳という、僕もよく知っている宗教学者なんですが、この2つの本を対照しました。右側が去年の5月に出版されています。左側がそれから遅れること8ヵ月後に出た本です。後出してのは、前に書いた本を十分使えるんですよ。それでよく見ると、僕の本の引用がいっぱいあるんですね。黙って使っているんですね。そういうことはよくある話で、この本のなかで『葬式は、要らない』とか、タイトルはすごくいいんですね。インパクト強いでしょ。「葬式は、要らない」。向こうは「寺よ、変われ」って言ってんだけど、変わるわけではないって思いながら、「変われ」って言っているわけですね。

だけど、こっちは「葬式は、要らない」。そうか、葬式をしなくてもいいかもしれない、と思いつく人がすごく多くて、こちら20万部以上売られています。私は9万部で止まりました。でも、内容的は圧倒的に右側の僕の本の方がいいんです。そして、過激なんです。左側の島田氏の方が過激だと言って、お坊さんたちが「どうしよう」って浮き足だっているんだけど、決してそんなことはない。右の方、見ていただくと、お葬式の部分にもかなり触れてます。かなり強烈。そんな

ことを最初にこの本を提示しています。

ところで、「檀家」って字、みんな書けますか。檀家とか、檀信徒っていうでしょ。何偏だと思う？檀家の檀は木偏です。でも島田さんは、本の中で、時々木偏になったり、土偏になったりするの。そんな本なんです。

島田氏の本で何を言っているかといえ、この2冊に共通点は2つあるんです。

まず「お葬式にはお金がかかる」。テーマはお葬式ですが、私の本も寺の部分の中にはお葬式の部分に触れています。その中でお葬式っていうのはお金がかかる。それに見合ったものになっていないというのが、この2人のまず1つ共通点です。

もう1つは、「葬式の内容、執行する儀式の意味がわからない」。皆さん、お葬式に参加されたことがあると思うのですが、お葬式をやっているお坊さんたちが何をやっているのか、このお経はどういう意味があるのか、説明を受けたことがありますか？そういうのが、いわゆる説明責任、アカウントビリティがないっていうことですね。

それから戒名、浄土真宗では法名ということになるんですけど、戒名とか法名の意味がよくわからない。そこに法名料とか戒名料とか、お金に絡んだよくわからないものが生まれてきている。それが共通しています。

もう1つは、葬儀社というのが、最近すごく多くなってきていますね。名古屋が特にすごく、100m 道路を歩くと1分間に何軒か葬儀社に出くわす感じ。葬儀社はホールを持つわけ。そのホールを持って、ホールにその亡くなった方のご家族が集まったり、知り合いが集まったり、お葬式をやるわけです。

今まで、ホールができる前は、お葬式を自宅でやるか、お寺でやっていたわけ。そ

れがホールで葬儀をやるようになった。するとお坊さんは、時間を決めて、衣と袈裟をバッグに詰めて、ホールへ出かけるわけ。そして1時間お経を読んでくると、それで仕事は終わり。

昔、お寺でやった場合には、お寺の内外整備をちゃんとやって、飾りつけもやって、そういう作業がすごく多かったんだけど、今は楽でたまらないって感じですね。そして、1時間ほどお経を読んでくれば、お布施が入ってくるということを、2冊の本とも批判しています。

それから、お坊さんというのは本音と建前がすごく、その落差が建前論なんです。問題としているのは、心が問題とか。よくわからないでしょ、心の問題って。そういうことが前面に出てくるんですね。

それからもう1つ、「お釈迦様はこうおっしゃった、親鸞聖人は」っていうところになってくるんだけど、お坊さんから「私は」っていう主体性を持った話がでてこない。これがつぎに共通すること。

その他に、いろんなネガティブな要因があるんだけど、それに対して島田さんは何を言っているかという、「だから、葬式はいらぬ」と言っているんですよ。僕はそうじゃなくて、「だから現場はこうする」って言って、『寺よ、変われ』を書いているわけです。ここが大きな違いであります。

仏教界を揺るがした3大事件？

お葬式に関しては最後にお話しますが、大阪に應典院という、とても有名な寺があります。檀家を持たない寺であり、お葬式をやらぬ寺である。また、本堂になっているところが劇場空間であり、そこでたくさんの若

手の演劇人たちが毎日いろんなことをやっている、そういうお寺なんです。

そこの住職といいますか、代表の秋田光彦さんと私はずいぶん親しくさせていただいているんです。お互いにそういう活動をしていますと、保守的な仏教界から確実に弾かれていくわけです。ふたりともいじめられ、弾かれ、大変なものなんです。

それに負けないように、めげないでやっているんですが、その應典院で島田さんと秋田さんが対談をやったんです。そのとき島田さんが日本の仏教界を震撼させた最近の3つの事件というのを話したんです。

一つ目は、「千の風になって」の流行。お聴きになったことがありますか。中身を精査するとすごく何かズシンと来る歌ですよ。この曲が流行ったということはどういうことかと言ったら、「私のお墓の前で泣かないでください。そこに私はいません」。島田氏は、それは魂の存在が、先祖供養がもう意味が無くなっていると言うわけです。お墓の中にいないのに、そのお墓の前でお経を読むこと自体がもう違うんじゃない、とその程度の解釈です。

2番目に『葬式は、いらない』っていうのが大ヒットしたこと。自分が書いた本のこと。普通だったら、もうちょっと謙虚にね、ちょっと売れましたって言えばいいのにね。

3番目に、流通業界のイオンが葬祭界に進出したこと。お聞きになったことはありますか。

この3つが仏教界を揺るがしていることで、「これらのことは単純なことではなく、一過性のことでもない。本質的な社会の変化をあらわしている」と言っているんです。

このことについて、彼が言っていることは、「千の風になって」は、先ほど言ったよ

うに、そのお墓の存在意義みたいものが疑われているということになってきていますし、先祖供養は無化していると考えているわけですね。

それから「葬式はいらない」というのは、先ほど私が話したように、高額な葬儀費用の負担であるとか、それから老後の不安と死後の不安みたいなものがある中で、葬式というものの位置づけが変わってきている。それから葬儀屋さんの出現で、葬儀の内容がずいぶん大きく変わってきている、お坊さんとかのかわりが変わってきているというようなことを言っています。

流通業のイオンが葬儀に参入してきたというのは、結局、葬式仏教と言われている日本の伝統仏教がやってきたことの裏返しなんだ。そういうことをはっきり言ってるんです。

死にむかう700万人の ベビーブーマーたち

島田氏は、この3つが本質的な社会の変化をあらわしていると言うんですけども、僕はこれら3つは表層的な問題だと思っています。表層的な問題の裏側にある本質は何かというと、「団塊の世代」です。今のような3つのものが受け入れられる、支持されるようになったのは、おそらく団塊の世代だろうと思います。団塊の世代は700万人います。私自身団塊の世代のど真ん中です。

今から40年前、私はこの龍谷大学におりました。今は3号館というのかな、私の在学中にロックアウトされたんですね。70年安保のど真ん中でした。その中で、2年間一度も講義を受けたことはありません。全部レポートで通っちゃいました。そういう時代だっ

たんです。そんな中で、何がそのときの僕らの生きる証というか、目標だったかといったら、この日本で革命を起こすことが、大目的だったんですね。

革命を起こすためにはどうしたらいいか。左翼的な思想を持ち続けるために、マルクス、レーニンが僕らの宗教の教祖だったんです。つまり団塊世代っていうのは、「宗教」という、今ある仏教やキリスト教などからは非常に遠い世界にいた人たちです。

もう1つ言うと、僕はベビーブーマーです。700万人が生まれ、学校へ行きます。公教育を受けたときに、その公教育の場に宗教教育はほとんどありませんでした。それから大学に行ったら、今いったような状態です。そして大学を卒業したら、長かった髪を切ってサラリーマンになるわけです。高度成長時代のど真ん中です。そこに入り込んで、お金というものは一番大切なものだ。今日より明日、明日より明後日と右肩上がりの思考の中でずっと生きてきた連中が団塊世代です。団塊世代がいつまでもいい状態ではありません。バブルを演出し、バブルの崩壊に出会い、そして今、退職の時期を迎えている。61、62、63歳です。

私は62歳です。この61、62、63歳の人たちがこれからどういうふうになるかといったら、30年で死に絶えていきます。30年プラスアルファで、この700万人は全部地球上からいなくなります。つまり、700万人が老、病、死という領域に入っていくわけですから滅茶苦茶大変なことです。30年の間に、今まで考えられなかった数の人間が一気に年老いて、一気に病気になり、一気に死んでいくわけです。

このように社会が変わっていく中で、島田さんが話した3つのことは、団塊世代の人た

ちの思考に合っているんです。

団塊世代は先ほども申し上げましたように、これから老、病、死という領域に入っていく。非常に困難な時代に入っていく。社会保障もそれに見合ったものになるかどうかともわからない。そういった中で、苦しみ、老苦、病苦、死苦という人間の中の苦しみの中で、一番大変な苦しみを味わっていかなければいけない。そして、そういう苦しみに出会ったときに、実は私どもの世代は戦争を知らないんです。ひょっとしたら朝鮮半島で起こる可能性もあるかもしれませんが、私たちは今まで戦争に向きあったことがない。

朝鮮戦争、それからベトナム戦争、イラン戦争等は遠くの戦争として印象はありますが、自分たち自身が命の危険性にさらされたことがない。戦争による強制的な死、不条理な死に出会ったことがない世代なんです。しかも1970年代のはじめに、在宅で生まれること、在宅で死んでいくと、在宅死、在宅誕生と、院内死、院内誕生がクロスし始めたのが1970年前半です。

それがどういうことかという、死というもの、命、生というものがどんどん覆い隠されるようになってきた。医療の中に覆い隠されるようになってきた時代です。だから生まれることも、死んでいくことも実際に目で見えることはほとんどない。そういう世代がどのようにして、自分の死を受け入れて、何をよりどころにして死んでいくのか、非常に僕は興味があります。私自身も団塊世代ですから。

団塊世代と伝統仏教

そういうことを考えたときに、団塊世代の死というものがどうなるのか、彼らは何を考

えているんだろうか。また、今まで死をいうものに関して、死の受容に関して、あるいは死をどう考えるかについて、宗教、哲学の領域について、日本の伝統仏教は団塊世代とどういうふうに向き合っているのか、逆に団塊世代は、日本の伝統仏教にどう向き合っているのか、これは興味が湧くところですね。

団塊世代と伝統仏教について、仏教の存在感と有用感は、団塊世代に関しては明らかに欠如しています。先ほど大矢野先生がお話くださったように希薄化しています。

それから仏教への見切り感。「仏教なんか頼んでも何もできないよ」というそういう感覚が充満している。そして、その仏教に変わるムーブメントが出てきている。仏教の本質っていうのは、生苦、老苦、病苦、死苦という4つの苦しみ、「四苦」ですね。四苦を軽減する、軽くする、緩和する、あるいは無くしていく、そういったところに仏教の本来の意味がある。しかし、いまのお寺は、苦を持つ人たちに寄り添い、そしてその苦を軽減していくという仕事ができているということなんですね。そのことをもう、団塊世代は見切っている、見限っていると考えられます。

そんなところで、その新しいムーブメントの兆しというのがこれなんです。仏教に変わる、新しいムーブメントの兆し「千の風になって」。7、8年前ですかね、「千の風になって」の話を僕は訳詞者の新井満さんから聞いていました。紅白歌合戦で爆発的に売れちゃって、それから彼は「千の風」で飯食っているようなものなんですけどね。

その新井さんがその詩に曲をつけ、あのよう売れたわけですが、1970年代にハワード・ホークスという映画監督がいたんですが、そのハワード・ホークスのお葬式のとき

に、当時の俳優ジョン・ウェインがこの「千の風」を朗読しているんですね。もうずいぶん古い話です。「千の風」は英語で12行か13行の短い詩なんですけど、これはどうもネイティブの人たちが作ったんだろうと言われている。でも作者はわからない。その中にある「千の風」の感覚は非常にシンプルで、僕は好きですね。

この新井さんとは神宮寺で対談をやっているんですが、その裏側にお墓があるんです。「私のお墓の前で泣かないでください」というのを、彼はここで歌うわけだよね。するとその瞬間になんとお墓の方からね、強い風がビューと吹いてきた。背筋がゾクゾクとしましたけどね。彼と話しながら、これも「千の風」が売れる前の話ですから、そこで僕は「千の風」をお葬式に使うということをやらずいぶんやらせてもらいました。

「千の風」の再生物語と

団塊世界の死生観は一致する

「千の風」が伝える再生の物語と団塊世代の死生観とがどうも一致するんですよ。符合が一致する。その符号が一致するというのが、私は団塊世代だからよくわかる。1つには「命の再生と循環」を言っている。この地球上で、宇宙で、命を再生する、循環するんだということを言っている。地球感覚のアニミズムというのがあるんですけども、いろんなものに霊が宿り、神が宿る。そういう感覚を持っている。これはもうネイティブの人が持つ感覚なんですね。今の近代的な私たちの生活ではなかなかこの感覚がわからない。だけど、こういったところに興味を示すというか、シンパシーを感じる世代が私たちの世代です。

存在の肯定と死の肯定。決して死を否定してはいけません。死は悪いもんだ、死というものには怖いもんだ、ということは言っていない。それは再生と循環というのがベースにあるからです。そしてもう1つ、「病みかたや死にかたがわからない」。

団塊世代の共感や支持を生んできたもう1つの大きな理由は、「わかりやすい」ということです。お経のようにわかりにくくはないということなのです。

もう1つ言うと、これは大事なところなんです。「お坊さんを介さなくても理解ができる」ということなんです。ここが団塊世代が興味を持ったところだ、支持を集めたところだと思います。

団塊世代ばかり言っていますが、さっき「葬式はいらない」という話になっていましたが、葬式と団塊世代の関係をまとめてみると、「千の風になって」のヒットというのは、伝統仏教に頼らない死生観を団塊世代の人たちは持ってきているということです。伝統仏教に頼らなくなると、自分の死のよりどころ、あるいは受容する方法は自分たちが独自に選んでいるんですね。それが根底にあって、直葬（ちよくそう）、直葬（じきそう）とも読むんですが、今、非常に流行っています。

病院で亡くなると、そのまま病院に24時間置いていただいて、24時間後に霊柩車をもって火葬場へ直行して火葬する、それで終わり。出てきた遺骨に関しては、それを灰にして山に撒く。そういうパターンでお葬式といますか、宗教儀式を入れないで、散骨、散灰する人たちが今、東京では20%を越えて30%に近づいています。

『葬式は、いらない』の大ヒットに関して言えば、伝統仏教への見切り感が大きくて、

直葬の方になっている。お葬式の意味がわからない、そしてお金がかかる、こういったところから、じゃあできるだけ簡単にやろうじゃないかという話になり、直葬に行っちゃっている。

スポンサーか消費者か

その次に流通大手のイオンの葬祭業進出については、伝統仏教の代替として葬儀が取り込まれる形になっています。イオンは流通大手ですから、葬祭業進出によって大きな利益を予測しているわけです。マーケットリサーチがちゃんとできているわけで、団塊世代700万人にターゲットが絞られているわけです。今、イオンカード会員が2200万人。2200万人のカード会員情報はビジネス情報としてあり、その中で葬祭、葬儀が提供されることは滅茶苦茶大きなことです。

「あそこの坊主は気に入らない」「あそこの寺は金がかかる」とかいろいろ言っているよりは、葬儀の金額が出てきて、しかもいろんなメニューが自由に選べる。つまり、商品棚に葬儀という商品がいっぱい乗っかっていて、それを買うわけです。つまりイオンはお葬式をやろうとしている会員をはなから消費者として考えているわけです。

ところが日本のお寺は、消費者とは考えないで、檀家さんたちをスポンサーと考えている。スポンサーと考えるのと、消費者と考えるのと、その差はものすごく大きいんです。イオンはカード会員を中心とした約2200万人に対して、明らかに葬儀の革命であると言っている。

そして、もう1つは、葬儀費用を明示して透明化しています。費用の中でお坊さんを頼む場合、お布施というものについても明らか

にして、ホームページに一時載ったのですが、全日本仏教会は「それはけしからん」と言って、お布施というのはそういうもんじゃないんだって言ってクレームをつけたんです。僕はそういうもんだと思うんですが、それでホームページから削除されました。だけど1回見せておけば、お布施に金額っていうか、定価があるんだってことがわかったときに、おそらく会員はイオンに聞きますよ。

どんどんこの流れは止まらない。そういう状態で、自分たちは葬儀の消費者であるという人たちが山のように増えてきています。それがこの団塊世代、700万人の団塊世代の非常にお気に入りであるような気がするわけです。

結論を申しますと、伝統仏教は苦戦する。苦戦するというよりは、崖っぷちに追い込まれている。こうしてニコニコ笑いながら講演している場合じゃない、そういうことですね。じゃあ、どういうふうにしたらいいんだろうか。問題点をお坊さんたちは把握できていないんです。自分たちがどういう状態になっているか、危機感がまったくないという状態になっています。危機感がない中で、はっきりと問題点を把握した方がいいんじゃないか、と私は思います。

死に至る日本の仏教

寺と社会とのかかわりを中心にして、問題点を把握する。

皆さん、お読みいただいたかもしれませんが、『寺よ、変われ』の本の中で問題点を把握するというので、僕はニューヨークタイムズに記事を出しました。その記事というのは、2008年7月14日に「In Japan, Buddhism May Be Dying Out」という強烈な、その見

出しで出しているんです。死に絶えるということ、Dying Outと言っているんですね。この記事がアメリカに渡り、そしてニューヨークタイムズの紙面に載ったんですけど、このニューヨークタイムズの記者は、秋田県の男鹿半島の成熟集落というか、限界集落をはじめ、田舎のいろんな取材をしているわけですね。もちろん都会で取材しているんですけど。

その中にニューヨークタイムズの記者たちが指摘した日本仏教の危機、Dying Outするであろうという危機が5つ書かれています。1つは、「葬式仏教が揺らいでいる」という危機。先ほども言ったように、お葬式に関して、今まで寺や、伝統仏教っていうのは一手に引き受けてきましたね。90何%引き受けてきたわけですね。その90何%とはお布施という形で全部お金が絡むわけです。そういうお金が儲かるシステム、儀式を独占してきたわけですね。その中から、やはり生きていく人間よりも、死んでいる人間の方に重きを置くというのが、寺の流れになってしまった。これが1つ葬式仏教が揺らいでいる原因だと思っています。

その次に「家族的経営寺院が消える」という危機。これもものすごく大きいことです。浄土真宗では世襲が基本ですね。私どもの禅宗は世襲を基本にしないということになっています。でも90何%は世襲になっています。世襲ということは、家業化するということです。家が寺だから、子どもが跡を継ぐ。老舗のお菓子屋さんとか旅館とかが、みんな家業として代々伝えていくということになっている。寺が家業化してきたら、それでいいのかなと思います。自分の発心みたいなものがそこに生まれなくて、そのまま私の仕事はこうだから、ずっとそのまま繋がっていつ

てしまうような気がしますね。

3番目。「葬儀社との関係による、葬儀の変化」という危機。これは先ほどお話しした通りです。1999年に62%が自宅葬か寺院葬、30%が葬儀場であったのが、2007年には28%が自宅葬か寺院葬になり、61%が葬儀場へ変わった。8年ぐらいの間にガラッと数字が変わった。今、これがもっと激しくなっています。80%近くが葬儀場での葬儀になっている。お寺での葬儀というのはもうゼロに近づいています。都市部では直葬が20～30%。

あと「檀家システムが破壊される」という現実。檀家システムというのは門徒さんとか、檀家さんとか言うんですけど、僕の神宮寺という松本の寺の環境の中でも顕著になってきています。私のところは年間お葬式が55件くらいあるんですが、去年のデータでいえば55件のうち、20件くらいは檀家外でした。檀家以外の人です。菩提寺を持っている人も中にはいるんです。わざわざ菩提寺に断りを入れて神宮寺に来る。流動化がどんどん起こっている。そういうことです。

最後に「お金からんで、悪いイメージがある」。これは特に戒名料というものについて、悪いイメージを与えているということです。

「戒」をめぐる根本矛盾

でも、これは先ほどの団塊世代のように表層的な問題だと私は思っています。もっともっと深いところに根がある。仏教がどうしても閉塞感から逃れられない大きな問題がある。それは何かというと6つの理由です。

1つは、「戒」の問題。戒律の戒です。戒というのは自分自身が仏教徒として、宗教に

いる人間として、宗教が決めているきまりを守れるかどうかということです。日本の仏教は大乗仏教と言われていますが、大乗仏教の戒、守るべき行いは大きく5つあります。「不殺生戒」「不偷盗戒」「不邪淫戒」「不妄語戒」「不飲酒戒」です。最初に出てくるのは「殺すな」ということ。殺すなと言われてたって、私たちは食卓に毎日、殺されたものを食べてきているわけですね。これでもう戒が成り立たなくなっている。それから不偷盗戒、「盗むな」今の信州だったらリングがいっぱい道端でなっていますからね、のどが渴いたら1つ食べたいなと思うでしょ、それが不偷盗戒なんです。それから「犯すな」。それから「余分なことは言うな」。それから最後に「お酒に飲まれるな。お酒を飲むな」。お酒を飲むなと言われると、僕なんかもう今から40数年前、50年ぐらい前から、この戒は破りっぱなしですよ。こういうことが五戒。たった五戒ですよ。

ところが上座部仏教って、タイ、スリランカ、カンボジア、ラオスあたりの上座部仏教はこの戒が227あるんです。お坊さんたちはそれを守らなくちゃいけない。毎日毎日、きちっとそれを守っていかないといけない。そういうものがある。

その戒の問題から戒名の問題がでてくる。戒名というのは「仏の決まりを守れますか」と問いかけて、「守れます」という方に与えられる名前であるわけです。ということは戒名というのは普通、お坊さんから与えられる。つまりお坊さんというものが戒を堅持していないと、戒名というのは元々出せないものでしょ。こっちお坊さんの戒がバラバラなのに、「あんたに戒をあげるよ、お金頂戴よ」。このこと自体がおかしな話です。そういう循環になっているわけですよ。そういう問題は

ものすごく大きい。こここのところは根本矛盾です。この問題は今の日本の仏教では絶対クリアできない。これが本当の危機だと私は思っています。

それから発心の問題。先ほど言ったように寺が家業化している、ということになると、自分はなぜお坊さんになったのか、というものが見えないうまま、見つけられないままに坊さんになって、家業だからやってる。

ほかにも抱える根本矛盾

それから苦へのアプローチ。お釈迦様が四門、「生」「老」「病」「死」という4つの門に出て行ったときに、初めて世の中の苦しみがわかるわけです。お城の中で見えなかったものがわかり、「苦しみをどう軽減するか」が大きな目標になる。それが苦へのアプローチ。その苦へのアプローチを寺は持っているはずなんですけど、そこができていない、そんなふうにあります。

それから大量死への認識。これはさっき言ったとおり、団塊世代がこれから700万人死んでいきます。これは大量死です。大量死が今まで起きたのは、14世紀のヨーロッパのペストです。中世ヨーロッパの肺ペストです。この流行後、何が起こったかというトルネッサンスです。それから宗教改革も起こっているんです。これはもう、その時点の宗教のレベルでは耐え切れなかったということです。2400万人死んでいるわけですから。日本では、それよりちょっと小規模ですけど、700万人の死がこれから襲ってくるわけです。そのときに伝統仏教はそれに耐えられるでしょうか、という意味です。耐えられないと思います。

それから有用感の減少・見切り感の増大。それはさっき言いました。

最後に、いのちの定義の変化への対応です。これはどういうことかと言うと、私は東京大学の新領域創成科学研究科で講師をして10年になります。その新領域創成科学で何をやっているかと言うと、先端生命科学をやっている。この研究科に68名の大学院生がいますけれども、その院生たちの研究テーマは何かと言ったら、遺伝子ばかり追いかけている。遺伝子の尻尾ばかり追いかけているわけです。

このことによって、今まで治せなかった、治療できなかった病気が治っていく、そのための薬ができる。それから実験としても自分の体の中で、その生体の中で試さなきゃいけなかったものをiPsというような細胞によって、そのコピーを作り上げて、実験ができるとか。僕なんかは最初にダメになるのは肝臓だと思うんだけど、肝臓が壊れたときに、自分の肝臓のコピーができていて、それがすんなり入ってくる。そういうような遺伝子をベースにした研究をやっている。

簡単に言うと、私という存在と同じ私ができる可能性が十二分にあるわけで、実際にやっているわけです。クローニング、クローンですね。明らかに命の定義が変わって来ているんですよ。

こういったものに今の仏教界は追随できていない。まったくできていません。それに対して、この間も脳死判定の新しい基準ができてはいるんですけども、これについてもどこの仏教教団も声を出していません。ただ、大本教という宗教教団がきちんとメッセージを出しています。以上のべたようなことが根本矛盾です。

お坊さんの専門性とは

この中で、「じゃあ寺の存在はどうなっているのか」「お寺って何をするとところか」「坊さんとは何をすると人か」という素朴な疑問を皆さんに出していきたいと思うんです。

ちょっとお聞きしてもいいですか。坊さんは何のプロフェッショナルだと思います。お坊さんとは何をすると人か。寺には住職がいるわけでしょ。住職とは何をすると人だと思いますか。

院生（口々に）葬儀専門。お寺を維持する人。地域の長老の世話。一般的には、お経、葬式の専門家。命を伝える…？。

高橋 わかりました。職人さんの場合、たとえば畳屋さんだったら、畳職人です。畳を作ることが専門でしょ。それからコンピューターのプログラマーの仕事だったら、コンピューターのプログラムを組み立てるのが専門性でしょ。

ところがお坊さんの専門性を聞いたら、ほとんど今のような答えで、明確な答えが出てこないんです。これ、やっぱり考えないといけないと思う。先ほどの定義から考えてみれば、世の中にあるたくさんの苦しみ、苦しいものをお寺という場所を使って、軽減していく、緩和していく、そういう役割を持つ人たちだと思っています。そのためには、地域の人たちとうまく連携を取りながら、いろんな宗教の人たちのコーディネートをしていく。先ほどおっしゃっていただいたところの中に入っています。そんなふうと思うんですね。こういうことをもう1回改めて考え直さないといけないんじゃないかと思っています。

そんな中で、現代日本の仏教には主義、仏教ISM（イズム）というのが、3つ大きく分

けられると思います。

1つは原理主義、仏教原理主義。仏教原理主義というのは、原始仏教への傾倒とか、あるいは解脱とか、悟りとかいうところに向かっていくための、修行とそれから戒律をベースにした主義ですね。これはキリスト教原理主義、イスラム教原理主義と同じような意味合いです。

その次に信仰主義ですね。信仰主義っていうのは、毎日仏様にお参りをするとか、お茶をあげるといふ、そういったこと。すでに自分の生活の中にそういった信仰心を交流させていくという、それが信仰主義です。

3番目が社会対応主義。もちろん、1番と2番が入っている場合も、入っていない場合もあるのですが、苦しみの現場、苦の現場に入りこんでいって、それをなんとかしようじゃないか。それが社会対応主義になるわけですが、そういう3つの主義が日本の仏教にはあると僕は思います。

「生」「老」「病」「死」の全過程に向き合う

今から10年前の話ですが、宗教評論家ってのは宗教をどう評論するのかよくわかんないんだけど、宗教評論家のひろさちやさんと同席したんですね。そしたらね、ひろさんがこう言うんです。「私は、仏教原理主義者であって、高橋さんは仏教ご都合主義者です」って。当たっていることが結構あるんですが、でもね、ひろさんが決して原理主義者だとは思わない。自分のマンションの金庫の中に金塊を入れてそれを盗まれた人だからね。そういうのは原理主義者とは言わないですよ。そういう話の中で、彼は原理主義者と言っている。

僕の場合、寺は何をする場所か、坊さんと

は何をする存在か、神宮寺は何をやってきたか。神宮寺とは私の寺ですが、これは完全に社会対応主義です。社会にあふれる苦に対応する。苦しみの解消や緩和、共苦への意識を高めていく。苦を抱える地域や人々を対象にし、現実的、包括的に対応をしていくということが、今まで私がやってきた仕事であるということです。

その中のいくつかをご紹介します、そこから寺の仕事をつらねてみるということに話をすすめてみたいと思います。神宮寺の組織図をまず見ていただきます。私がずっと関わってきた四苦への対応は「生」「老」「病」「死」との4つに分かれています。

まず、「生」の中には何があるかというところ、子どもたちの預かりや相談事業。それからNPOとの協働。命の伝承というプログラムで、戦争とか非戦とか平和の問題をやっています。それから「アクセス21」というのは、タイのHIVに感染した人たちの支援NGOから立ち上げたものです。こういったものが、生きるというところにカテゴライズされてきます。

それから「老」。コミュニティ・ケアの実践を行い、その中で「ケアタウン浅間温泉」という、先ほど言ったもうお客さんがあまり来なくなった温泉街を活用しながら、高齢者のケアを実行している。それから「ライフデザインセンター」というのは、成年後見制度を中心にして動かしています。そういうところの代表をやっています。その中には介護保険制度、自立支援法、そういった制度が入り込んできています。お寺の中にそういう制度を組み込んでいるということです。あるいはお寺の中だけでなく、外部の、私に関わるNPOとしてそういう活動をしているということです。

それから「病」は、医療との連携が非常に密になっています。この医療との連携は、諏訪中央病院という病院があって、その前の院長で鎌田實という人がいるんですが、鎌田さんと今から30年ほど前からターミナルケアのしくみを作り上げてきました。こんなところから、ターミナルとかりビングウイルとか、それからプレグリーフ、レスパイト、家族に対するケアですね、病人ではなく患者さんではなく、家族に関するケアとか、それからデスエデュケーション。これはちょっと問題あるんですけど、そういったもの。

最後に「死」に関しては、事前に相談とか看取り、それから葬儀、ビリーブメントケアからグリーフケア（悲しみの受けとめ）とか、ビリーブメントケアとは死別ケアですが、そういったものを中に入れていく。そういったものがうちの寺の中で動いている。

そうすると何が変わってくるかと言ったら、地域に安心と信頼が湧き上がってくるんです。自分のことを言っただけで、本当にそうなんです。本当に地域の人たちが頼ってくれるようになっていきます。頼ってくるって、「こういうときにどうしたらいいだろうか？」という話がどんどん来るようになっていきます。これに今、仕事の主なものをかけているわけです。

エイズ・ホスピスで

作務衣のプロジェクトをつくる

アクセス21を見ていただきたいんですが、HIVに感染した28歳の女性です。HIVの収容施設でエイズ・ホスピスと言われているんですが、バンコクから北に170km行ったところにロブリという町にパパートナンプというお寺があります。この写真を撮った2日

後に亡くなっています。彼女に出会ったところから、僕は HIV に関する仕事を始めていきました。

この彼女がいたエイズ・ホスピスは、約 60 人から 90 人の最末期の方たちが収容されているんです。玄関の入口がどうなっているかと言うと、玄関の入口に棺桶が重なっているわけです。生と死が隣り合わせになっている、そういう場所です。毎日、ひどいときは 8 人とか 9 人が亡くなっていくわけです。そういう死の現場に、僕は 1998 年に入りました。

そこから HIV に感染した女性たちをどうやって支援していったらいいのか。HIV に感染してエイズを発症してしまって、もう命がないという人たちに、僕はどうにも手を出しようがないんだけど、当時からいい薬ができてきて、HIV はウイルスは体の中に入れたまま、仕事ができ、日常生活を何不自由なく過ごしていけることができるようになった。

でも、そういう人は差別の対象になって仕事がなくなっている。そういう人の仕事を作ろうとって、チェンマイの郊外に作務衣のプロジェクトを作りました。今、私が着ている作務衣はそれです。全部、彼女たちが作ってくれた作務衣です。写真、左側のラインは全員が HIV に感染している女性です。皆さんのお手元に小さなニュースレターがあると思います。また、後でご覧になってください。

12 月 1 日が世界エイズデーなので、私は明後日、日本を発ってタイに入ります。そんなことで、作ってくれた作務衣を私が買い取り、日本で販売し、フェアトレード、利益を向こうに還元するというやり方をしています。小室等さんが着てくれていまして、少し

ずつ人気ができています。この写真に並んで写っているのはその女性たち、日本のメンバーも入っています。彼女たちの顔が最近、非常に明るくなってきています。生老病死に向きあう神宮寺の仕事の一部です。

コミュニティ・ケアで温泉旅館を再生

もう 1 つ、寺の仕事として、今日のメインであります。コミュニティ・ケアを皆さんに見ていただきたいと思います。この映像をご覧ください。

ある温泉旅館の再生の物語。一度は廃業した旅館を蘇らせたのは、温泉は観光客のものという常識、これを覆した発想の転換でした。

信州・松本で千年の歴史を誇る浅間温泉。この温泉街も観光客は 15 年前の半分に減ってしまいました。しかし、かつての賑わいを取り戻した旅館があります。

朝 9 時、普通の旅館なら客を見送る時間に、客が続々とやってきます。訪れるのは、皆地元のお年寄り。この旅館、4 年前にダイケア、つまり日帰りの介護施設に生まれ変わったんです。お年寄りたちは、折り紙をしたり、会話を楽しんだり、夕方までの時間を過ごす。もちろん、元温泉旅館だけに、源泉かけ流しの温泉に入り放題。さらにかつての客間で昼寝もできる。ダイケアながら、旅行気分が味わえます。しかも介護施設の認定を受けているので、利用者が支払うのは 1 日およそ 1000 円と格安です。

温泉旅館の意外な転身。思いついたのは、近所の寺の住職、高橋さんでした。

高橋 「温泉の持っている力っていうのは、体と心の癒しだと思うので、そういう場所が必要だなんて。人生の一番最後の時期って、そういうところでゆったりしたいなと思うんだよね、やっぱり」

しかし、大きな壁が立ちはだかりました。古い木造建築であったことが、お年寄りには危険だったのです。あちこちの段差にはスロープにし、急な階段には手すりも必要です。改修費用は5000万円に上りました。それだけのお金を高橋さんだけで捻出するのは不可能でした。

そこに救いの手を差し伸ばしたのは、当時、地元銀行の支店長だった原さんです。原さんは、高橋さんの熱心な働きかけに心を打たれ、近所のデイケア施設を調査しました。

原「採算の見通しについて、介護を必要とされている方が840人ぐらいいらっしゃったんですが、そのうち、日帰り介護に通っている人は34人に過ぎませんでした。地域が必要としている事業だと思いましたが、十分採算性のある事業だと判断し、ご融資させていただきました」

こうして、かつての旅館はデイケア施設に生まれ変わりました。銀行からの融資も順調に返済。1度廃業に追い込まれた旅館は今や黒字に転じています。

高橋「観光だけの概念で、やっていくときに、やっぱりうまくいかない場合も大いにあるし、実際、見えているわけだから、そこを別のアイデアを出す。元はすごくいいものがあるわけだから」

高齢化が進む今、この取り組みは全国の福祉関係者からも注目され、毎月のように視察団が訪れています。

観光客を癒す温泉から、地元の人を癒す温泉へ。こんな温泉があっても、いいと思いませんか？

高橋 ぜひ、温泉に入りに来てください。これが映像に出てきた御殿の湯、この右下が、その源泉かけ流しという、すごくいいお風呂です。まあ、じいちゃん、ばあちゃん、大喜びでこのお風呂に入っています。ここには今、居宅の事業所があり、ケアマネージャー

が常駐しています。

そのお隣が東御殿の湯。これは訪問介護の拠点になっていることと、それから成年後見制度の拠点にもなっています。

それから、今年お借りしたんですけど、油屋という旅館です。ここはまだ出来ていませんけど、何をやるかと言うと、助産所を作ります。それから、この同じ屋根の下でターミナルケアをやります。ということは、どうということかと言うと、亡くなっていく人と生まれてくる赤ちゃん、それがこの温泉のお湯、産湯を使い、旅立つときにそれで湯灌のお湯にするという。そういう浅間温泉のお湯をテーマにした、生と死の現場にするということです。

最終的な願いは

在宅中心のホスピス・ムーブメント

まだ完成していませんが、これから数年かけて実現していくつもりです。今の話を図にしてみます。真ん中に御殿の湯、東御殿の湯、油屋本館という私が借りているお宿があります。ここが私どもの家です。この家に住んでいるじいちゃん、ばあちゃんがたとえばまだ元気で動けるときに、認知になっているかもしれないけれど、動けるときは通所します。それで、寝たきりになった場合には訪問介護が上階からきます。それから認知が激しくなった、何かどうしても家族が面倒を見られなくなったときのショートステイ。それからグループホーム。その延長上に在宅のホスピスと、デイホスピスを考えています。

デイホスピスは、イギリスでは普通になっているんですね。ホスピスに入っている患者さんたちは寝たきりだと思っている方は多いんですけど、痛みのコントロールが上手く

いけば、歩けたり動けたりするんですよ。そういう方たちがデイサービスとしてホスピスを使い、そこで痛みの緩和を行う。それからナイトケア、それから助産院というものができた。

こういう1つの場所を使って、小規模多機能で、しかも地域に密着したケアのシステムのことをコミュニティ・ケアといっています。このコミュニティ・ケアの拠点に、今、浅間温泉がなっているということです。それは私どもがやっているケアタウン浅間温泉の中心的な考えです。

最終的に、コミュニティ・ケアとターミナル・ケアをドッキングさせる形で、新しい在宅中心のホスピス・ムーブメントを起こそうということです。そのために2005年に、私はイギリスとアイルランドに入りました。そして在宅でのホスピスケア、緩和医療とデイサービスのホスピスケアを見てきました。十分できると思います。家で死ぬという選択が可能になる、ということです。

コミュニティ・ケアとターミナル・ケアを結びつける試みは人々にとって、非常に安心を与えることになるのだと思います。「家で死ぬ」。そういうフレーズを聞いただけで、「あ、私も家で死にたい、畳の上で死にたい」という思いをもった人がすごく多くいらっしやる。一貫して、生老病死をひとつの串刺しにした流れでもって、ケアというものを加えて考えていくという形です。それで生きること納得できる地域を作り上げることと、家で生きて、家で死ぬという選択と環境づくりをしていく。そのことが小さな浅間温泉という場所の中で実現できたらすごいなと思っています。少しずつですが、先が見えてきました。

お寺の可能性をひらく

—NPOとお寺の協働—

それに対して寺はどう考えていったらいいのか。この問題は、私が関わっている寺だけの話ではないんです。ひょっとしたら全国に8万数千あるお寺、これが何らかの形で今の状態から抜け出していったり、別の新しい問題意識を持ったりしたときに、たぶん地域は変わる。それは浅間温泉で実証済みです。

それをやっていったときに、たとえばお寺が地域で生老病死に関わるということになったら、寺の可能性はずっと大きくなっていくということです。先ほど、最後に映像の中で、僕が言ったんですが、「もともといいものを持ってたんだもん、旅館がね」。寺もやっぱり、もともといいものを持っているんです。潜在的な力としては、すごくいいものを持っている。それを使うということです。その可能性を追求する。地域へ貢献するという意識を持たなくてはダメ。地域から何しろ全部取り上げるようではダメ。

それから、異分野との協働。これがなかなか坊さんたちはできない。一番手っ取り早いのは、地域のNPOと協働することです。会場を貸すだけでもいいんです、寺の本堂を。あの建物を。

それから自分たちが今、苦しんでいることをちゃんと相談受けられるようになればいい。そうすると異分野との連携はガッツと広がっていきます。

総事業費 2億5000万円

雇用 91人の代表者

それからもう1つは雇用の創出です。僕が2006年まで代表をしていた法人はこれだけ

あります。ケアタウン浅間温泉という法人の代表をしていました。それから長野県 NPO センターという中間支援組織なんですけど、長野県ではじめてできた NPO、この代表を 10 年間やりました。それから「NPO 夢バンク」といって、NPO に融資する銀行を立ち上げましたが、これは直接的な金銭支援です。日本の NPO は 4 万近くあると言われますが、まだまだ規模的には小さいですね。予算規模も大きくない。予算の中で、お金と収入の中に上げられるものとしては、会費や委託金、補助金、助成金、それから寄付金や事業費、収益金であったりするわけですが、その他に、今、もう少し収入の道を広げようと考えたのがバンクなんです。要するに、お金を貸せますと。

貸せるからには、返してもらわないといけない。だからあなたの NPO のミッションは動かさないけれども、経営内容に私どもはタッチします。そしてテクニカルなアシストをかけますよ、ということを使うんです。そして、そうするとその NPO はお金を得て、事業計画もちゃんとできて、それがドンドン進展していくってことが目に見えてわかるわけです。

お金を借りるということは返さないといけないから、事業計画がきちっとしてくるんです。今まで日本の NPO というのは、何しろボランティア団体からスライドしたのがすごく多くて、補助金と助成金でずっとやってきた。それを変えたのがバングラディッシュのグラミン銀行がそうですね。お金を借りるということは返さないといけない。そこから新しい自立の動きが始まる。それが NPO 夢バンクです。

それからもう 1 つ、アクセス 21 っていうのは、先ほども申しましたタイの HIV への

支援をやっている。ライフデザインセンターというのは、先ほども言いましたけれども、成年後見制度を実施してやっている。こうして全部通してみると、やはり市民活動、市民の意識をどんどん醸成していきながら、自分たちの力で地域の問題となっているところを引っ張り上げていこうと。それを目の前に出しながら解決を図ろうじゃないか、ということの流れなんですよ。

私はこれらの代表をやっていました。宗教法人神宮寺をいれて 6 法人あるんですね。6 法人の年間の総事業費が 2 億 5000 万円です。2 億 5000 万円を私が責任を持って、毎年どこからか集めてこなければいけない。もちろん、ケアタウンは介護保険の給付金になりますから、収入は安定していますね。そういった形でやっています。雇用している人は全部で 91 人、私の名前で給料を出している人は 91 人いるんです。もう、これは社長の仕事ですね。そういう状態になっている。こういうところで、実際に地域に雇用が生まれるんです。

それからのちのプロセスへの認識というのは、生老病死にずっと繋がっていく。継続したその人の命に付き合っていくということは、どういうことを意味するかということ、死だけを切り取って、お葬式だけをやっている今の仏教の世界とは違うということです。亡くなっていった人の老病死、あるいは生老病が全部見えてくる。見えてくるプロセスの中で、最後にこの人にとってどういうお別れが必要なのか、考えていくことですね。そうやってきたら、お葬式はずいぶん変わってきます。その変わってきたお葬式。その姿について、この講演の最後に見ていただきたいと思っています。

次なる課題は 限界集落にグループ・ホームを

こういうことをやってきて、専門性を持ってやってきたんですけども、スタートは全然こんな専門性も何もなかったんです。何をやったかといったら、最初にミニデイサービスをお寺でやったんです。介護保険制度とかに関係なく。じいちゃん、ばあちゃんを集めてお茶飲み会をやるんじゃないか。ここからスタートして、こういうニーズがみんなわかってきたんです。だから、これを作らなくてはいけなくて形になって、ケアタウンができた、という流れなんです。最初からドカーンと計画的に行ったわけではなくて、地道な努力が重なって、結果的にこうなった。

最終的に何を考えているかというところ、これは私の寺から15分ほど行った限界集落。今、「限界集落」という言葉を使わずに、何が成熟しているかよくわかんないけど「成熟地域」というそうです。その成熟地域の一ノ瀬というところに30戸ありますけれども、30戸ほとんどすべてにじいちゃん、ばあちゃんが生活している。1日に3本バスが来るだけ。こういうところですよ。こういうところで、じいちゃん、ばあちゃんは生きています。だから、この人たちが生きてきた、この場所にグループホームを作ろうとしています。生まれて、嫁いで、生活してきたこの場所にグループホームを作ってやろうじゃないかって、そういう話ですよ。おじいちゃん、おばあちゃんたちがどういう動きをするのか、すごく楽しみなんですけど。そんなことを考えています。

これは私たちどもだけでできるわけじゃありません。行政との協働が必要になってきます。それから他のNPOとの協働が必要に

なってきます。協働感覚がものすごく大切で、要するにコラボレーションって言われるんだけど、特にNPOの場合は、同じような仕事をやっているNPO同士が、ものすごい憎悪感を持っているっていうことが多いです。そこをクリアしない限り、なかなか上手くいかないと思います。

葬儀を通して命をささえた一つの物語

最後のテーマに入ります。生老病死に関して、死だけを切り取って考えない、ということをもまず第一番に考えていきたいというふうに思います。そういう流れが出来てきたときに、葬儀を通して命を支えるお寺の有用性、お寺の存在感、こういったものが絶対出てくる。地域にとって、それはとてもいいことだと思います。

そのいのちを支えた物語をこれから皆さんに聞いていただきたいと思います。私の講義を聞いてくれた方には、すでにこの話は済んでいるんですけども。

実は、今年の5月29日に50歳の女性が亡くなりました。大腸がんでした。Fさんといいます。6月1日に神宮寺でお葬式が行われました。彼女の歴史をちょっと紐解いてみたいんですけど、家族は夫、2人の男の子、今年浪人した子と、高校2年生。それから音楽が大好き。ハンドベルの中心的メンバーだった。

2008年の8月、2年前の8月に大腸がんだということを告知されました。そして、腸閉塞の状態です手術したんですが、開けてみたら転移が激しくて、化学治療に入ります。手術したのはある大学の附属病院です。そこから、その頃から彼女は頻りに私のところに入り始めるようになりました。そして、その

時々困ったこと、その時々苦しい思いを伝えてくれるようになりました。それと同時に、リビングウィルといって、生きているうちに自分の意志、つまり、私が意識がなくなったときにはこうして欲しいとか、あるいはお別れはこうして欲しいと伝えてくるようになりました。

そして、抗がん剤の治療をやったんですが、なかなか効果があらわれなかった。そして、彼女が僕のところに来たんですが、何しに来たかといったら、「高橋さん、諏訪中央病院を紹介してもらえませんか」って言ってきたんです。これはセカンド・オピニオンといわれているものです。ファースト・オピニオンはある大学の附属病院。もうひとつの意見を聞きたいと言って、彼女は僕のところに来た。僕は紹介しました。諏訪中央病院には抗がん剤の魔術師と言われてるドクターがいるものですから、その先生を紹介しました。そして、そのセカンド・オピニオンを受けに行ったんです。

帰ってきたときに、彼女の表情がまったく変わっていることに気がつきました。落ち込んでしまったんです。セカンド・オピニオンというのは、私たちは何らかの希望を持って行くわけですが、その大学の附属病院の診断と同じってことを目の前で言われ、治療法も同じって言われたとき、すごく落ち込むんです。もう私は助からないと思うわけです。それも致命的な状態になっていましたから、「これでもしかしたら、ひょっとしたら何かあるかもしれない」と思って、彼女はセカンド・オピニオンに行ったわけなんです。そこで奈落の底に突き落とされるような感じになっちゃうんです。

末期医療で、ここのところはものすごく大きな問題です。もうみんな、セカンド・オピ

ニオンってことをずっと言われていて、インフォームド・コンセントとセカンド・オピニオンが気持ちを救っていくものだと思っているんだけど、決してそうではないという場合もある。

彼女はまた改めてその大学の附属病院に行くんですけど、主治医が女性から男性の若い主治医に代わっていた。そして、そのデータを見て、彼がなんて言ったかといったら、「あと3カ月から半年です」とはっきり言いました。そして、それはセカンド・オピニオンを受けて落ち込んでいる彼女にとって、とても辛い、苦しい答えでありました。

さらにそのドクターは、それに加えて何を言ったかといったら、「ここにこれとこれの治療法があります、どうします」と矢継ぎ早に聞いてきたというんです。矢継ぎ早に聞いてきたということは、選択肢がない状態で、選べということです。どういう状態かという、「これをあんたが選んだ」という確証がドクターは欲しいわけです。つまり責任逃れです。

そういったことが目に見えたので、彼女は附属病院を飛び出しました。そして、代替療法をやったり、あるいは樹状細胞ワクチン療法という第4世代の免疫療法っていうのがあって、割合流行っています。保険がきかない、結構高い、というやつなんですけどそれを選びます。

だけど、とうとうその効果がなく、手詰まりになってしまう。この1月に50回目の誕生日をお祝いしました。そして、3月に長男の卒業式に出席し、5月に症状が急速に悪化して、私を含めて、夫、それから子どもたちが臨死ケアに入ります。そして、5月29日に亡くなっていきます。

彼女が僕に語った、1ヶ月前の言葉を紹介します。こうです。「死に、いいも悪いもない。私にとっては、ただ辛いだけ。その辛さを何とか塗り固め、他人に気を使い、自分にうそをつき、いい人生だったと語って、私は死んでいく」ということを言っているんです。強烈でしょう。

彼女が何を思っていたかといったら、「みんな優しくしてくれる、緩和ケアチームの人たちはみんな私に優しくしてくれる。それが優しくしてくれれば、優しくしてくれるほど、私は自分の思いを真正面から、出していくことができない辛さ」です。これもね、本人でなければわからないところがあると思うんですけど、「私、自分にうそをついている」と言っているんですね。この状態で取り乱して、悪態をついて、自分を支えてくれる人たちを責めていくということが、自分自身にとっては悪い死だと彼女は思いこんでいたんですよ。

そんな言葉を聞いたときに、僕は、彼女のご主人と子どもたちとしっかりと話をしました。実はこの段階まで、夫も子どもたちも彼女の死ということをお口にしなかったんです。ずっと避けていました。けれども、こういう言葉が彼女の口から出てきたときに、それはちゃんとどういうふうにかえるかということをお僕は彼らに話をしたかった。

彼らはその言葉を受けて、大きく変わりました。どういうふうに変ったかという、夫はほんとにどうしたらいいのかわからない、という状態。あたふたあたふたし始めました。それまで悠然と構えていたんだけど、バタバタし始めました。子どもたちはお母さんの前で平気でポロポロ泣き出しました。こういうことが彼女にとってみれば、本当の愛の証のような感じがしたんだと思います。こ

れは僕は、彼女の心の中に入ってみたいとわからないんですが、僕にはそういうふうに感じました。

それが、1ヶ月ほど続いて、亡くなる1週間前に、彼女は僕にひとつのCDを渡してくれました。ケルティック・ウーマンといって、ケルトの音楽なんですけども、「ユー・レイズ・ミー・アップ」という曲なんです。「高橋さん、これ、私のお葬式のときにかけてください」と言って僕に渡されました。

そのお葬式のことってということで、この曲を聴いてみました。この曲、深い意味の中に「You」っていうのが、Fさんの夫と子どもたちは、私をこのように扱ってくれた。私はあなたたちによって、私以上の私になれた、とそういう意味の曲なんです。すごく象徴的だったんです。それで1ヶ月ですごく変わってきた、何ていうのかな、いのちの受け止め方、彼女に対する、病者に対する、患者さんに対する家族の対応、思い、こういったものをすべて彼女はわかっている、彼女に死を受け入れさせた、そういうふうになります。

そして、彼女はこの曲をお葬式にかけてくださいっていうことが、どういうことかという、彼女からの子どもと夫へのメッセージとして、これをかけて欲しいというふうに言ったわけです。

普通、こういう曲が出てきたときに、今の仏教のお葬式は、この曲が入ってくる余裕はありません。伝来の古い形での、その宗派に則ったお葬式がずっと延々と続くわけです。この曲が入ってくる場所はありません。

だけど、僕はこれがメインだと思って、これに取り組みました。彼女が亡くなった後、彼女から預かっていた200枚の写真を選びました。200枚の写真からDVDを作ったんで

す。それにこの曲を入れました。それが最期の彼女のお見送りの曲になりました。

会場が暗くなり、お葬式が始まりました。会場が暗くなり、静かに「ユー・レイズ・ミー・アップ」という曲が流れ始めたんです。そして、その映像が流れ、写真が映像に映し出された瞬間に160人もいたお友だちですね、お友だちとか関係者の中から、嗚咽がもれるどころか、大声で泣き出す人も出てきたんです。ところが真正面に座っていた、ご主人と2人の男の子は僕は横でずっと見てましたから、よくわかったんですが、涙を一滴も流さずに画面をしっかりと見つめていました。これは、お母さんからの大切なメッセージなんだということを受け取っていたんだと思います。こういうお葬式ができるんです。これが本当のお葬式だと僕は思います。

その時の映像を見てください。「ユー・レイズ・ミー・アップ」という意味、それから彼女が何を伝えたかったか、そして、受け取る側がどう受け取ったか、見ていただきたいと思います。

これは神宮寺のお葬式のメインです。皆さんのお手元に配ったこの冊子は神宮寺が檀家さん用に出しているパンフレットです。このパンフレットを見ていただくとわかるんですけど、いろんなところに工夫がされています。そして、いかにしたら経費を軽減できるのかとか、あるいは亡くなる前、亡くなったとき、亡くなった後、どういうふうにしたらいいのか、それに対していろんな相談がある場合は、いくらでも相談してくれというようなことが書かれています。これは檀家さん専用です。檀家さんにお渡ししているやつです。

こういったことが実際にできるんです。葬儀屋さんにもそのまま任しているとそれがで

きなくなってしまう。

寺の可能性として、今のようなこういうひとつの、たとえば死というもの個人が一人で対面しなければならない、困難な問題である、それは彼女がFさん自身が本当に強く感じたことだと思います。それに苦しみ抜いたんです。だけど、それをこの苦しみを誰が支えて、担ってくれるのかということを考えたときに、家族、あるいは本当に親しい人々、それからお寺のお坊さん、医療者、こういった人たちが支えていかなきゃいけない。支えるべき人材、支えるべき物事は山ほどあるというふうには私は思います。それが亡くなっていく人、この病気を持った人に対する「ユー・レイズ・ミー・アップ」だと私は思っています。

そんなことを皆さんにお話し申し上げて、お話を終わらせていただきたいと思います。

[質疑]

司会 どうも、ありがとうございます。皆さんからご質問があればお願いします。

高橋 今見ていただいたように、私のところのお葬式って、ひとつひとつ全部違うんです。1人1人全部違うっていうやり方をしている。たとえば、カラオケが大好きだった飲み屋のおっちゃんがいる、それが突然死んだんですね。行ったら、息子はおやじの部屋を見せてくれ、なんせ壁面全部に自分が歌っているカラオケテープがびっしり入っているわけですね。お葬式どうやるかって、「これ、カラオケきりないよね」という話で、お葬式の最中、僕は最初から最後までこのおやじが歌っている歌を流していました。

それから巨人が大ファンのおやじがいて

ね。おやじさんで亡くなったんだけど、そのときに棺の中に入れるものがあつたら、入れたげてもいいよって言つたら、巨人の応援グッズが遺体を埋めるようにして入つたんです。メガホンとか手ぬぐいとか。

そのあとお葬式の時、一発目にどうしてもこれを流して欲しいと言われたので、流したのが「読売巨人軍応援歌」なんです。お葬式のしょっぱなです。それで僕、六甲おろしの方が好きだからって言つたんだけど、それじゃなくてやっぱり読売巨人軍の応援歌だった。「それしょうがないだろうな」って私は思つていたんだけど、それをやつたら、なんと音楽が進むにしたがつて、みんな泣き始めちゃつて、会場の人たちが、こうハンカチを使うようになってしまつてね。

それから、もう1つが、94歳の床屋のおじいさんが亡くなって、現役の床屋だったんだけど、その床屋のおやじが60年間使つていた理容椅子があるんですよ。お客さんが座る椅子。それをお寺に持って来てもらつて、正面に置いて、お坊さんが座る曲録つていう赤い椅子の代わりに僕がそこに座つたの。

僕はお坊さんになって30数年経つんだけど、床屋に全然縁がなかつた。だけど、じいさんの最期だからちょっと座つてやろうって、はじめて座つて引導を渡したんですよ。そしたら家族が喜んじやつてねえ。そんなことがあつたり。

毎回テーマを決めて、ターゲットを決めてお葬式をやる。だから今の映像も、私自身で作るんですけども、写真を見ているうちに200枚もの写真を見ているうちに、この人の人生が見えてくるんですね。だからこそ、きちつとしたお別れができるつていうふうに私は思いますね。そういうお葬式を島田裕巳は知らないんですよ。見たことないんです

よ。1回、うちのお葬式を見せてやりたいなと思つているんですけどね、どういうふうに言うんでしょうかね。

質問 今日はどうもありがとうございます。現在、京都市で障害のケースワーカーをやつています。来年3月に現職を退職する予定ですけども、さっき先生はライフデザインセンターで成年後見制度のことをやつておられるとのことでした。

私も社会福祉会のパートナーで、去年の12月から成年後見人をやつていまして、今日、参加させてもらったのも、今すでに94歳と82歳の身寄りのない方の後見人になっておりまして、高齢認知の方ですので、すぐに何があるわけではありませんが、やはり今後、看取りとかどうしたらいいのか。今日は非常に示唆のあるお話をいただいてよかつたです。

高橋 ありがとうございます。えつと後見は任意ですか？

質問 後見人として3人。そのうち2人が高齢の今言つた94歳と82歳の男の方と女の方です。

高橋 そうですか。実、明日の昼、北海道から6人の方が視察に見えるんですよ。このケアタウン、ライフデザインセンターに。6人の方が北海道で「葬送を考える市民の会」というのを作り上げたんです。「葬送を考える市民の会」つてのは、日本でもすごく早くできたところで、活動はすごくいいんです。だけどね、葬送だけを切り取つているわけですよ。その中で、やっぱり介護保険と成年後見制度はどうしても入れておきたいということで視察に来られるんです。

今の話の中で、高齢者福祉もそうなんだけど、専門性が強くなりすぎて、横のつながりがなくなつて、時系列だけ。そこのところを

あちこち目を向けていくやり方をしないと、いけないと思っています。

生老病死を一貫していく中で、死の専門をやっている、さっきの北海道のような方々も周りにいらっしゃるかもしれないので、そういう方々と成年後見制度の重任している中から、お付き合いをしていくといいと思うんですけどね。

質問 文学部の仏教史学専攻の1回生で、実家はお寺なんです。親としては継いで欲しいという予定があるんですけど、自分としては、お寺がこれから社会の役に立つのかどうかとか、全然わからなくて、でも大学で学んでいく中で、自分が将来どうしようかっていうのをいろいろ悩んでいるんです。

その中でこういう話を聞くたび、自分で本を読んだりして、いろんなことに興味を持ったりするんですけど、実際に何かアクションをしようとしたときに、まず何からすればいいのかないと伺いたい。

高橋 一番いい方法は、文学研究科の実践真宗学に入るのが一番いいね。でも、あそこで刺激受けるっていうのは、結構大きなことだと思う。それで、まあ、本人の資質によることもよるんだけど、結構面白いなにかが、今、世の中が見えるというか。

どうしたらいいか、すぐこういった事例、僕のこのような事例に飛びついたり、できる

っていうふうに思ってしまうと、できない。僕、ここまで行くのに30年かかったから。30年間これからやっていくという思いで、地域に関わって、地域をよくしていくってことを考えていけば、決して難しいことじゃない。時間はかかるけど、そのとき、そのときにこれは誰のためになっているんだろうとか、私が一番最初に考えた思いがそのまま継続しているんだろうとか、そういうことを繰り返し、反省しながらやっていくといいと思う。

だから、考えてもわからないっていうのじゃなくて、そういう意識を持っていれば、必ず目の前にいろんな課題が出てくる。課題を1つ1つ丁寧に、解消していけばいい、っていうふうに思います。

実践真宗学研究科の連中がいるから、そういう人たち話を聞いてみればいいと思う。お寺だったら、そのところから考えたらいいいかな、と思います。

さっきから言っているように、お寺はものすごくいいものを持っている。潜在能力はすごく強いと思う。今はそこを出せていないだけ、アウトプットができていないだけの話です。いっぱいやることがある、そう思います。

司会 ありがとうございます。

[2010年11月27日]